

農業問題の複雑さを正面から受け止め、 “一歩”を踏み出したい

科学ライター 松永 和紀 まつながわき

農業を取材していると、その複雑さに茫然となることがよくあります。特に農業と環境の関係は、極めて難しい問題をはらんでいます。気候変動を例にわかりやすく言えば、農業は温室効果ガスを大量に排出し、気候変動を大きく促す可能性のある“加害者”であり、一方でその変動に左右され簡単に不作にも陥ってしまう“被害者”でもあります。両方のバランスをうまくとり、できるだけ環境影響を小さくしつつ、増え続ける人口を見据えて食料生産力を上げて行くことが求められています。

これは生産者や研究者だけの課題ではありません。消費者も、農業が両方の面を持つがゆえに食料供給という大きな恩恵を受けられることを意識しなければなりません。消費者にも自然と社会と人間との調和を目指すために担うべき責任があります。

残念ながら、消費者は自らの責任を未だ意識していません。具体的になにをすべきか、まだ考え始めている人が大勢います。消費者に、社会に、生産現場や研究の最前線の情報を適切に伝え続けることで、私たち消費者の“一歩”を促したい。微力ながら、科学ライターとしての役割を果たしたい。最近、そんなことを考えています。

独立行政法人農業環境技術研究所にはこの7～8年、年に数度はお訪ねしています。以前に比べて目標が明確になり、ますます活気が出てきたと感じています。今日はどんな研究成果をお聞きできるのか、楽しみにしています。

プロフィール

1963年、長崎市生まれ。京都大学大学院農学研究科修士課程修了（農芸化学専攻）。毎日新聞社に10年間、記者として勤めた後、フリーの科学ライターに。農業、食の安全、環境問題等を取材している。主な著書は『踊る「食の安全」 農薬から見える日本の食卓』（家の光協会）、『植物で未来をつくる』（化学同人）など。最新刊は『食の安全と環境—気分のエコにはだまされない』（日本評論社）。

『メディア・バイアス あやしい健康情報とニセ科学』により、日本科学技術ジャーナリスト会議の科学ジャーナリスト賞2008を受賞

2004年度～09年度、農業環境技術研究所の評議員。現在、獣医事審議会委員、食育推進会議専門委員などを務める。

